

**書き下ろし小説**  
**時々ボソッとロシア語でデレる**  
**勇者のアーリャさん**

---

**燦々SUN**

目が覚めると、そこは異世界だった。

「ん？」

ザワザワとした、生徒会室には似つかわしくない喧騒に政近が目を開けると、そこには漫画やアニメでしか見たことないような光景が広がっていた。石造りの床に赤い絨毯が敷かれた、いかにも玉座の間といった雰囲気の間。

「え、なにこれ」

「えっと、あれ？」

すぐ近くで上がった声に振り向けば、そこには直前まで生徒会室で一緒に仕事をしていたはずのアリサとマリヤ。その向こうには、壁際に並ぶ、時代錯誤な格好をした中世貴族っぽい人々。そして足元には、青色っぽい光を放つ魔法陣。

「……うん？」

ゆっくりと光が弱まっていくその魔法陣を見下ろし、政近は眉をひそめる。だがそこで、

「よくぞ参られた異世界の勇者たちよ！」

正面から周囲の喧騒を貫く大声が上がり、政近たち三人はパッと顔を上げた。

真っ先に目を引いたのは、巨大な玉座に腰掛けるドレス姿の少女。しかし実際に声を上

げたのは、その隣に立つ髪の先と髭の先がくるりと巻いた中年男性らしい。壁際の貴族らしき面々よりも更に豪華な服を着ていることから察するに、恐らく宰相的なポジションにいる人間なのだろう。

「混乱しているのも無理はない。だが、まずは落ち着いて話を聞いて欲しい！」

その言葉に、政近は近くに二人と顔を見合わせた。幸い、アリサもマリヤも、戸惑ってはいるようだがパニックを起こしそうな様子はない。そのことにホツとしつつ、政近は声を掛ける。

「まあ、とりあえず話を聞きましょうか」

「そう、ね……」

政近の言葉に、アリサは周囲を警戒心たつぷりに見回しながら言う。一方、マリヤは玉座の方をチラチラ見ながら言った。

「うん……でもその、あの女王様？ お姫様？ あれって……」

「あ、うん。言いたいことは分かります」

「やっぱり、そうよね？」

マリヤの視線を追って、政近とアリサも玉座の少女へ目を向ける。その三人の視線を肯定と解釈したのか、少女の隣に立つ男性が再び話し始めた。

曰く、この世界には人類と敵対する魔族なる存在がいる。魔族と人類は長年国境を挟ん

で均衡状態を保っていたが、先日魔王を名乗る強大な魔族がここ王都に姿を現し、人類に對して宣戦布告をした。そしてその開戦の意志を証明するように、女王の婚約者である高位貴族の令息を攫って行ったのだという。

そこまで語ると、宰相らしき男性は「くうっ」と無念をそんな顔をして、バツと玉座に座る少女を手で示した。

「そう！　こちらにおわすチサキ陛下のご婚約者、トーヤ殿を攫って行ったのです！」  
「やっぱりご本人じゃねえか」

そう、先程から政近たちが玉座の少女を見ていたのは……その少女が、どっからどう見ても我らが副会長、更科茅咲にしか見えなかったからだだった。

「というか、会長攫われてんのかよ。普通逆では？」

その婚約者として出てきたこれまた聞き覚えのある名前に、「普通攫われんのは姫では？」と政近はツツコミを入れる。それと同時に、「なんだ、やっぱり夢か」という冷めた気持ち湧いてきた。それはアリスとマリヤも同じようで、アリスはどこか白けた顔を、マリヤは反応に困ったような曖昧な笑みを浮かべている。

いや、茅咲のことは別にしても、おかしいとは思っていたのだ。なぜなら、茅咲以外の人間が……なんか物凄く、印象が薄いから。さつきからしゃべっている男も、壁際で背景と化している貴族たちも、一言で言うならすぐくモブっぽい。メタ的な言い方をするなら

「ちゃんと描き分けが出来てないのかな？」と思うくらいに没個性。ぱつと見て残酷なくらいにメインキャラとサブキャラが分かれている辺り、一昔前のRPG感がすごかった。（気になるのは、アーリヤとマーシャさんだけは自分の意思を持つてるっぽいことだけだ……あのチサキ女王改め更科先輩はどうなんだ？）

彼女も、元の自分の意識をきちんと持っているのかと……窺う政近の視線の先で、それまで沈黙を保っていた女王が、玉座の肘置きを握り潰した。……握り潰した??

「へ、陛下?」

玉座の間に響いたバキゴキという不吉な音に、痛恨の表情を浮かべていた男が頬を引き攣らせる。同時に、壁際の貴族たちがザワツとどよめく。戦慄と畏怖の視線が集中する中、チサキ女王はうっそりと立ち上がると、カツと両目を見開いて叫んだ。

「忌々しい魔王め！ ここはやはり！ あたし自らトーヤを取り返しに行かねば!!」

その叫びと共にブワツと衝撃波のようなものが広間を駆け抜け、天井のシャンデリアがグラグラと揺れ、壁際の貴族たちがバタバタと倒れていく。

「い、いけません陛下！ 覇気を、どうか覇気をお収めください!」

「ええい止めるな宰相!」

そつと肩に手を置いて制止しようとした男を、女王はブンツと腕を振って拒絶する。その余波で、広間の壁が一部吹き飛ぶ。ボカーン。

「うわお」

「ええ〜……」

「あら〜」

嵐の神もかくやというご乱心を見せる女王陛下に、三人は若干現実逃避した。そして、  
(いやこれ……俺ら、いらんくね?)

三人が同時に同じ感想を抱いたところで、宰相と呼ばれた男が懇願するように叫んだ。

「異世界の勇者たちよ！ くれぐれもお頼み申す！ 我らが女王陛下が世界を壊す前に、  
魔王を討ち果たし、トーヤ殿を救出してくれ！」

「どっちが魔王やねん」



「……で、いつになったら覚めるのかな？ この夢は」

城下町に降り立った政近は、これまた典型的な中世の街並みを前にして、疲れ気味にぼやいた。

あの後、女王の乱心に巻き込まれないよう広間の外へと連れ出された政近たち三人は、あれよあれよと城の外まで避難させられ(追い出され?)てしまったのだ。背後にある城

門の向こうからは、未だに城が破壊される派手な音が響いている。

「にしても……お約束にツッコむのも野暮だけど、異世界から呼んだ一般人に戦闘訓練も施さず案内人も付けず、金と装備だけ与えて『じゃあ頑張つてね』ってマジか」

「不親切極まりない……というか、普通に非常識よね」

「まあまあ、茅咲ちゃん……茅咲ちゃんでもいいのかしら？ とにかく、女王様の大暴れに巻き込まれないようにしてくれたってことで、ね？」

無然とした表情で息を吐くアリサを、困ったような笑みでマリヤがなだめる。しかし、アリサはなおも納得していない様子で背後の城……未だ破壊音が続く城を、振り返った。

「そもそも……王様があれだけ強いなら、わざわざ私達を喚ぶ必要なんてないでしょう」

「それは、まあ……」

これにはマリヤも反論できず、困ったような笑みで言葉を濁す。そこへ、政近は溜息交じりに言った。

「まく納得いつてないのは俺もだけどき。でも考えてみれば、神が直接手を下すと世界的理的なものに悪影響を及ぼすから、その代わりとして使徒を遣わすくみたいな話はよくあるパターンっちゃパターンなんだよな。……女王様が暴れると世界が壊れるってのは聞いたことないけど」

「霸気とか言われてたわよね……なに？ 更科先輩は霸王なの？」

「魔王対霸王って、なんだか頂上決戦みたいよね」

そんな風に話し合う三人の服装は、先程までの制服姿から様変わりしていた。

青を基調とした服の上から銀色の鎧を身に着け、西洋剣を腰に差したアリサ。純白の神官服（シヨブ）を身にまとい、錫杖を持ったマリヤ。この服装からも察せられる通り、アリサの職業は勇者。マリヤの職業は聖女であった。

（うん……これもまたツッコんじやダメなんだろうけど、冷静に考えておかしいだろこの装備……）

マリヤの神官服はまだいい。こう、神聖的な何かを高める装束だと言われれば、まだ納得できる。だがそれにしたって、神聖さを象徴する衣装にしては妙に体のラインが出ててセクシーだし、絶対に不必要な穴やスリットから肌がチラ見えしていて大変けしからん。煩惱に囚われた、愚かな男達の理性を試していると思えない。それでも、異世界の神官服はこうなのだと言われればギリ納得は出来る。聖女ということは後衛職だろうし、防衛力皆無っぽい装備でもまあいい。問題は、明らかに前衛職であるはずのアリサの方だ。

（いや頭部がら空きやん）

その浮世離れした美貌が全く隠れていないアリサの装備に、政近は内心でツッコむ。



これはもう……防具というより、ファッションだった。一応鎧を身に付けてはいるが、急所すら満足にカバー出来ていない。胴体に関してはある程度保護できているが、本来最優先で護るべき頭部は……冠なのか髪飾りなのか判断がつかない、翼をモチーフにした断じて兜ではない何かを着けているだけ。そしてなぜかミニスカート。太い血管通ってるふとももが思いつ切り剥き出し。こんなんで戦ったらパンチラする気しかしねえ。

(こん中で一番露出度低いのが俺ってどうなのよ……)

一方政近自身は、黒色のフード付きローブを身にまとい、手には四隅の角の部分が金具で補強されたやたらとゴツイ本。一応職業は賢者で、この本は魔導書らしい。

「メニュー」

城の人に説明された通りに発声すると、目の前に青みがかった半透明のウィンドウが出現する。

画面は左右で内容が分かれており、左半分には名前や年齢といったプロフィールから保持しているスキルや各種ステータス値が、右半分には今の政近自身を模した精巧な3Dモデルが表示されていた。言うなれば、左がステータスウィンドウで、右が装備モデルとあったところか。なお、装備モデルの服などをタッチすると小さいウィンドウが開き、装備の詳細が表示される。他にも、右隅に所持金が表示されていたり、上の方の小さなタブをタップすると、パーティーメンバーであるアリサやマリヤの画面に飛んだりも出来ると

いう、まさにメニユー画面となっていた。だが……残念ながら、そこにゲームを終了するためのボタンは存在しない。

「ハア……どうすんだよこれ。マジで、魔王を倒さない限り現実世界には戻れないのか？」

本当は、もっと焦るべきなのかもしれない。もっと危機感を持って、魔物や魔族が跋扈する異世界に放り込まれたことを嘆くべきなのかもしれない。だが……この、どうやってもゲームにしか見えない世界観、やたらと没個性な人々。そして何より、なぜかこの世界のメインキャラと化している見知った人達の存在が、どうにも政近から現実感を奪っていた。

「これも、どう見ても会長だしなあ……つつても、会長になる前の会長だけど」

救出対象として渡された似顔絵を見て、政近は呟く。そこに描かれた垢抜けない少年は、たしかに以前本人に見せられた、高校生になったばかりの頃の統也であった。

「王様が更科先輩で、姫役が会長……？ この調子だと、有希や綾乃もどっかに出て来んのか？」

「あはは、そうかもしれないわね」

「あの二人が人類側の代表ってことは……」

そこまで言って、アリサは口を噤む。だが、その先は政近にも容易に予想がついた。

「もしかすると、魔王は有希かもしれないな。んで、その側近が綾乃？」

アリサがあえて言わなかったことをあつさり口にした政近に、アリサは少し非難がましい目を向ける。そして、へらつとした笑みを浮かべる政近に軽く溜息を吐いてから言った。

「もしそうなら、話し合いでなんとかなりそうね。まあとにかく、ずっとここにいても仕方がないから、そろそろ移動しましょうか」

「そうだな。視線も気にな……らないけど、なんか居心地悪いし」

これだけ目立つ格好をしているのに、街行く人々はこちらを見もしない。それこそ行動をプログラムミングされたNPCのように、機械的に街を歩き来するのみだった。それがリアルで見るとどうにも不気味に見えて、政近は軽く身震いする。そして、もう何度目になるか分からないが、自分の頬をつねる代わりに頬の内側をグツと噛む。

（うん……痛くない。なんか、引っ張られてるといっつか押されているといっつか、変な感覚はあるけど）

ということやはり、これは夢なのだろう。見ている人間が夢と自覚している夢。明晰夢というやつだ。それでも万が一、超科学的な何かでゲーム空間に意識を飛ばされ、痛みを抑制された上でデスゲームをやらされているという可能性も考え、政近は歩き出そうとした二人を呼び止める。

「あ、ちょっと待って。進む前に、使ってみたいスキルがある」

「え……なに？」

「ほらこれ、妖精召喚ってやつ」

自分のステータス画面に載っている項目を指差すと、アリサとマリヤもメニュー画面を開き、政近のステータスを見た。

そこには、《火属性魔法》や《水属性魔法》といった賢者らしいスキルとは別に、固有スキルとして二つのスキルが載っていた。ひとつは今政近が言及した《妖精召喚》。そしてもうひとつは……《獲得経験値十倍（球技は除く）》。

（滅茶苦茶イジってんじゃねえか）

リアルで有希に時々言われているスキルが実装されている状況に、政近はジト目になる。これが字面通りなら極めて強力だが、どうにも制作者の悪ノリを感じざるを得ない。それはそれとして、今気になるのは《妖精召喚》の方だった。

「……これが、どうしたの？」

「妖精召喚って……あれじゃないの？ サラマンダーとかウンディーネとか？ ああいうのを呼び出して、ドカ〜ンってやってもらう魔法じゃないの？」

「ああ、まあそうなんですけど……たぶんそういうのは、《精霊魔法》あるいは《召喚魔法》になると思うんですよね……」

マリヤが挙げたイメージは、ゲームでよくある精霊召喚のイメージだ。その亜種と考えれば間違っていないが……異世界モノで妖精召喚というと、また別のテンプレがある。

「異世界召喚とか異世界転生とかでよくあるパターンなんですけど、これたぶんお助け妖精的なやつだと思っんですよね」

「お助け妖精？」

「ゲーム的に言うなら、チュートリアルで操作方法とかを説明してくれる妖精みたいな？ 異世界をナビしてくれる、ヘルプ的マスコットキャラを喚ぶスキルなんじゃないかと……現にほら、このスキルは他の魔法と違ってMP消費で発動するものじゃなく、一回限りの使い切りスキルなんだよ」

この世界では、魔法を使う際にはMP（マジックポイント）を、武技を使う際にはSP（スタミナポイント）を消費するらしいのだが、このスキルではそのどちらも消費しない。

スキル名をタップして表示された解説を見ながらそう説明すると、アリスとマリヤは「う〜ん」といまいちピンと来ていない様子で首をひねった。しかし、二人共こういうことに関しては政近の方が詳しいとは分かっているためか、程なくして頷く。

「まあ、いいんじゃない？ 試してみただけじゃ」

「うん、いいと思うわ〜？ あ、念のため離れておいた方がいい？」

「ああ……うん、そうですね。念のため……」

仮にこれが大精霊や精霊王クラスの超存在を召喚できてしまうチートスキルだった場合、召喚の余波で周囲に被害が出るかもしれない。その可能性も考慮して、二人には少し離れた所へ移動してもらおう。

「それじゃあ……スキル《妖精召喚》、発動」

少しだけ羞恥を覚えながらもそう唱えると、政近の前方に巨大な魔法陣が展開されるようなことは、特になく。ポンツという実に拍子抜けする音と小さな煙と共に、小悪魔姿の有希が出現した。

『フツ、呼んだかい？ マイマスターよ』

「何やってんだお前」

実体化した脳内住人に、政近は真顔でツッコむ。そして、ニヨニヨと実に悪魔らしい笑みを浮かべる手のひらサイズの有希を見て、ガックリ脱力してその場にしゃがみ込んだ。

『おいおい何を落ち込んでいるんだい我がご主人様よ。こくんなに可愛い妖精さんが出て来てあげたんだぜ？ 喜べよ』

「誰が妖精だって？ どう見ても悪魔じゃねえか」

パタパタと動く蝙蝠の羽に加え、バツチリ角としつぽまで生やしてる有希を見上げ、政近はジトっとした目になる。と、そこへ遠巻きにこちらを眺めていたアリサとマリヤが

戻って来た。

「あの、久世君？　もしかして……もう終わったの？」

「ええっと、わたし達には何も見えないんだけど……」

「えっ」

マリヤの言葉に有希の方を見ると、有希は得意げに胸を反らして言う。

『ふっふっふ、私は召喚主以外には見えず、声も聞こえない存在……しかも頭の中で念じるだけで会話が出来る、素晴らしきご都合存在なのだよ！』

「そりゃ元々脳内住人だからな。というか、自分でご都合存在とか言うな」

『ふふふ、ご都合存在だからこそ……こんなことだって出来る』

そう言うと、有希は空中をスイーツと移動し……なんと、堂々とアリサのスカートを下から覗き込んだ。

「ちよっ、バツ！」

『ほう……白。白か……ふう』

「やめんかこのバカ！」

目の前で堂々に行われたセクハラに、政近はとっさに手を伸ばして有希を引っ掴もうとした。だが、その手が有希に触れることはなく、代わりに指先がアリサの剥き出しのふとももを掠める。途端、アリサの白皙がサツと紅潮した。

「っ！ なにすんのよ！」

「あでっ!?」

ガツンとすねを蹴りつけられ、政近は悲鳴を上げながら立ち上がる。衝撃に反してやはり痛みはないが、視界の隅に表示されたHPバーが、前衛職の一撃にガリッと削れるのが分かった。

「最っ低！」

「あ、あああ暴力はダメよアーリヤちゃん。ええっと回復魔法、回復魔法……」

お城の人間に渡された、初歩的な魔法が書かれた手帳を取り出すと、マリヤはわたわたときこちなく錫杖を構えて呪文を唱える。

「【下級治癒】」

その瞬間、錫杖から放たれたキラキラとした光が政近の体を包み、削れていたHPバーがグンッと回復した。

「ありがとうございます、マーシヤさん」

「どういたしまして〜」

マリヤにお礼を言いながら、政近は考える。

(に、しても……)

その先を継ぐように、マリヤが言った。



「本当に、呪文はロシア語なのね」

(それな!!)

心の中で激しく同意しながら、政近はお城での雑な説明を思い出していた。



「こちら、勇者様方の武器となります。それぞれ、聖剣、聖杖、魔導書、です」

未だ定期的に破壊音と振動が伝わってくる城の一室にて、政近たちは一応伝説級の代物らしい武器を渡された。

「これらには“恒久”と“成長”の加護が掛けられており、決して破損することも汚れることもなく、所持者と共に強さを増していく力を宿しております」

つまり、所持者がレベルアップすると武器も自動的にレベルアップするということだ。聖剣であれば切れ味が増したり様々な能力が宿ったり、聖杖であれば魔法の効果が強くなったり効果範囲が広がったり、魔導書であれば使える魔法が新たに追記されるらしい。

と、そこまで聞いたところで政近は声を上げた。

「ちよっと待ってください。俺達、魔法なんて使ったことないんですけど、どうやって使  
うんですか？」

「それに関しては、魔導書を読んでその通りにしていただければ発動するかと……」

「その通りに、って……」

言われるままに本を開き、書かれている文字に目を落とす。そして、真顔で一言。

「なんでロシア語やねん」

そこに書かれていたのは、日本語でも英語でもなく……思いっ切りロシア語。いや、召喚された時点で薄々気付いてはいた。なぜなら召喚時、足元で光っていた魔法陣に書かれていた文字が、ルーン文字とかではなくキリル文字だったから。だが察していたからと言って、納得など出来るはずもなく。

（なんでだよ！ 普通異世界ファンタジーで魔法っていったら英語が王道だろ！ ファイアボールとかウィンドカッターとかストーンウォールとか！）

これが英語表記なら、まだ政近は内容を理解できたかもしれない。だが、政近のロシア語力は実践の中で鍛えられたため、リスニングは得意だがリーディングはそこまででもなかった。要するにこの魔導書、素で読めない部分がある。

（辛うじて、なんと詠唱すれば発動するのかくらいは読めるけど……でも、いくら夢とはいえ、アーリヤの前でロシア語使うのは——）

「あ、ちなみに呪文を唱える際には、正確に発音をしないと魔法が暴発する危険性があるのでお気を付けください。毎年少なくとも数、魔法の暴発で命を落とす者がいるので」

「無理ゲーじゃねえか」

サラッと恐ろしい忠告をされ、政近は思わずそうツッコんでから、ふと疑問を覚えた。

「どうか、それなら普通の魔法使いはどうやって呪文の練習をするんですか？」

「それはもちろん、魔法が発動しないよう魔力を抑えて……賢者様も、魔力制御のスキルはお持ちですよ？ しかもスキルレベルMAXの……抑えられませんか？ 魔力」

「抑えられません。そもそも魔力って何」

その後、何度か説明を受けるも、政近が魔力を感じることは出来ず。政近は、職業「賢者」のチート性能によって呪文さえ唱えれば魔法を発動できるが、逆に呪文を唱えたら勝手に魔法が発動（ただし制御不能）してしまうという結論に至った。

「詰んだ」

かくして、ここに様々な理由によって、**「魔法が使えない賢者」**が爆誕したのであった。



（この《妖精召喚》が、何かそこら辺の解決策になるんじゃないかと少し期待してたのに……）

その期待に全く応えてくれなさそうな、アリサに蹴られた政近を見てケタケタ笑っている有希に、政近は恨めしげな目を向ける。その視線で何かを察したのか、アリサが険しい表情を少しゆるめて問う。

「……もしかして、そこに妖精がいるの？」

「ああ……すごい悪戯好きな妖精が、ね」

そう言つて、少し迷つてから政近は続けた。

「どうか、どう見ても小さい有希なだけど……」

「え」

「あらく有希ちゃん？ 見えてる？」

「いや、『見えてる？』つて、マーシャさんが見えてないじゃないですか」

有希がいる辺りに向かつて手を振るマリヤに、政近は呆れ気味にツッコむ。すると、有希がふよふよとマリヤの目の前まで飛んで、小さな手を振った。

『おくこつちからは見えてますよ〜そつちからは見えてませんか？ 見えてませんね〜？ よし』

小さく頷くと、有希はそのまま下降。なんと、マリヤの豊満な胸の谷間にすっぽりと体を収めると、満足げにニヤリと笑った。

『クククッ、小さな体である以上、これはやつておかないとねえ』

「おまつ……」

思わず声を上げかけ、ふと有希の言葉を思い出して頭の中で問い掛ける。

『お前なあ……というか、ゲームのバグみたいに普通にめり込んでるが。それ、感覚あるのか？』

『ないよ？ 気分だけ。いやあ、しかしでつけえ……否、絶景かな絶景かな』

『……』

やりたい放題の小悪魔に、「こいつ送還してやろうか」と半ば本気で考える政近だったが、そこでアリサが冷たい声を上げた。

「ちよつと……どこを見てるのよ」

「え？」

「ンもう、そんな風に見られると、照れちゃう……」

加えてマリヤが困り笑いで身を揺するに至って、政近は二人から見ると、自分がマリヤの胸を凝視していたように見えるのだと気付いた。

「いや違っ……！ 俺は、有希のことを……！」

「……本当にい？」

「本当だって！ 俺だってあからさまに人の胸をじろじろ見たりせんよ!?」

「ついさっき私のふとももを触っておいて、説得力の欠片もないわね」

「いや、あれも……」

「じゃあ聞くけど、有希さんは何をやってるの？」

「そ、それは……」

まさか、「アーリヤのスカートの中を覗いた挙句、マーシャさんのお胸に挟まって楽しんでしまってます」とは言えず、政近は口ごもる。その結果ますますアリサの視線が冷たくなり、政近はギツと有希を睨んだ。すると、ふよふよと目の前まで飛んできた有希が、実にうざったい煽るような表情をする。

『んん？ どうした？ 羨ましいか、羨ましいのか』

「おんまえ……!」

その小さな体を引つ掴んで懲らしめてやろうとするも、やはり手は空を切るのみ。傍から見ると実に奇妙な独り相撲をする政近に、アリサはひとつ溜息を吐いて肩を竦めた。

「……まあ、もういいわ。それで？ 有希さんは何が出来るの？」

「……おい、訊かれてんぞ。何が出来るんだ？」

その問いに、政近を散々煽り倒していた有希は空中で寝そべるような体勢になると、宙に頬杖をつく。

『うん？ そうだなあ……』

そして、少し考える素振りを見せてから、政近に向かってパチンとウインクをした。

『マスターの旅に、可愛さと愉快さを提供できる。ぜ☆』

「……」

『マスターの旅に、可愛さと愉快さを提——』

「繰り返さんでいい繰り返さんでいい」

額に手を当て、政近は改めて確認する。

「え？ お前……お助け妖精的なやつじゃないの？ 旅の中で、何かアドバイスくれるんじゃないの？ お店の場所とかギミックの動かし方とか」

『おくらいおいおいマイマスター……オレは異次元の住人だぜ？ そこら辺の知識はあんたと大差ないに決まってるじゃねえか』

「お前帰れよお!!」

お助けどころかお邪魔でしかない小悪魔に、政近は思わず叫ぶ。しかし、有希は応えた様子もなくひらりと両腕を広げて肩を竦める。

『それが、帰り方が分からないんだなこれが』

「は？」

『ほら、だって固有スキルの《妖精召喚》は使い切りスキルだから、送還機能なんてないし。実体がないあたしにはHPもないから、倒されて強制送還ってこともないし』

そう言われてメニューを確認してみれば、固有スキルの欄にあった《妖精召喚》の文字

は跡形もなく消え去っており、制御方法の手掛かりが完全に消えてしまっていた。

『ま、というわけで……仲良くやろうぜ！ ご主人サマ☆』

ひらっと政近の右肩に舞い降りて再度ウインクする有希に、政近は冷めた目を向ける。すると、有希は両手を顎に当て、きやるるん♪ と目をパチパチさせた。

『んん？ どうしたんだい？ 肩乗り有希ちゃんの圧倒的なあざと可愛さに見惚れちゃったのかい？』

「……実体がないくせに器用なやつだなんて」

『触れられなくても相対位置は固定できるみたいなんだよね、これが』

サラッと難しいことを言う有希から目を逸らし、政近は反応に困った様子でこちらを見る九条姉妹に話し掛ける。

「あく結局のところ、この妖精はただの賑やかしみたいです。期待させといてなんです。が、あまり役に立たないっばいですね」

耳元で「役に立たないとはなんだ！」と騒ぐ（声は耳ではなく頭の中に直接響く）有希を無視して、政近は続ける。

「俺にしか見えないし声も聞こえないし、特に魔法とか使えるわけでもないっばいの、で……」

そこまで言ったところで、ふと気付いた。



「……なあ、お前誰にも気付かれない上に俺の頭に直接声を飛ばせるってことは、先行偵察ではすごい役立つんじゃないの？」

『あたしマスターから一定以上離れられないっぼいんだよね』

「マジで役に立たねえなお前」

再びやいのやいのと抗議の声を上げる有希を無視し、政近は改めて言う。

「というわけで、本当にただの賑やかしみたいです。もうこいつのことは気にしないで、行きましようか」

「そ、そう……」

「うーん、見えないけれどそこに有希ちゃんがいるっていうのは、なんだか変な感じね」

困惑気味の二人を促し、政近は大通りにでかかど看板を出していた道具屋で、回復アイテムや非常食などが一通り入った“冒険者セット”なるものを三人分購入する。

「なんか、究極のタッチレス決済って感じだな、これ」

実際に金銭とアイテムのやりとりが行われることもなく、メニュー画面の残高が減ると共にアイテム欄に追加された“冒険者セット”という項目を見て、政近は呟く。そうしてその項目をタップすると、新たに開いたウィンドウの上に茶色い革のポーチが出現した。「この薬がポーションで、こっちがMPポーション……飲んででも掛けても使えるのか。」

すぐに使えるように、こういった回復アイテムはいくつか手元に持っておいた方がいいよな？」

「そうね。荷物になるものはストレージに入れたまま……なにこれ、これが折り畳みテナトなの？」

「魔法の道具みたいね。他にも不思議なものがある……」

他にも明かりをつける魔道具や火を点ける魔道具など、一通り中身を確認して盛り上がってから、政近たちはいよいよ町の外へと繋がる大門へと向かう。

「このステータスを見る感じ……前衛がアーリヤ。中衛がマーシャさんで俺が後ろから魔法撃つって想定なんだろうけど……」

その道中、改めて全員のステータスを確認しながら、政近は他の二人を窺うように言った。

政近の保有するスキルは、火水風雷土の五属性の魔法スキルの他に、魔法職として必須らしいスキルがいくつか。近接戦闘用のスキルは一切なし。そしてマリヤは、政近が持つ五属性の魔法スキルを《光属性魔法》に置き換えたようなスキル構成。この《光属性魔法》で出来ることは大きく分けて三つで、“加護”、“治癒”、“浄化”の三種の魔法が使えどか。“加護”は、仲間のステータス強化や防御結界の構築。“治癒”は文字通り。そして“浄化”は、毒や呪いの解除の他、アンデッドや悪魔といった一部のモンス

ターにダメージを与えることが出来るらしい。

(悪魔……ね)

『?』

小悪魔姿の有希(自称妖精)を見ながら、「こいつに浄化掛けたらどうなるんだろうか?」なんて物騒なことを考え、政近は頭を左右に振る。

(しかし、やっぱりアンデッドとかいるんだな……リアルなゾンビとか出て来たら、グロ過ぎて吐きそうな気しかしないんだが……まあ、そうなったらマーシャさんに頼るしかないよなあ)

アンデッド特攻の神官職がいる有難みを、しみじみと感じる政近だったが……逆を言えば、そこくらいしかマリヤが攻撃役として活躍できる場面はない。なぜなら、マリヤは他に攻撃に使えるスキルを一切保有していないから。一応固有スキルとして《マドシナ聖母の奇跡ミラクル》なる、「高確率で迷子になるが必ず目的地に辿り着ける」という謎スキルと、《聖女の慈悲》なる三回のみ回数制限付きの蘇生スキルを保有しているが、どちらも攻撃力は皆無。ステータス的にも物理攻撃面は貧弱で、完全に支援回復に特化していた。

(攻撃に使えるとしたら……結界張って体当たりとか? まあ防御用の結界がどれだけ攻撃に転用できるか分からないし、あまり期待しない方がいいか……)

そうなると、やはりマリヤは中衛で、自身と後衛の魔法職を護りつつ、前衛に加護や治

癒を飛ばすのが王道ということになるだろう。問題は……

「あなた、魔法撃てないじゃない」

「そうなんだよな」

肝心の後衛が、魔法職として完全に役立たずということだ。

攻撃が出来ない聖女と、魔法が使えない賢者。攻撃役が、まさかのアリサしかないという事実。

「……頑張れ！ 勇者アリサ！」

「他人事みたいな顔をしないでくれる!? あなたもパーティーメンバーでしょ！」

「いやあ、だって……」

曖昧に言葉を濁しながら、政近はアリサのステータス画面を見下ろす。《剣術》や《格闘術》といった、近接系のスキル。火水風雷土光の六属性に加えて、《聖光魔法》なる勇者専用の魔族特攻スキル。武技も魔法も使えるバランスの良いステータス。

「これももうアリヤだけではないだろ」

「アリーヤちゃん……いくら勇者だからって、これは流石にバランス崩壊だと思おうの」  
「私に言われても困るんだけど……」

流石に専門職には劣るようだが、一人で近接遠隔支援回復まで全てこなせる万能っぷり。更には固有スキルとして《勇者の一撃》という、HPが一定以下の時にMPとSPを

全消費して超威力の必殺技を放つという、なんとも主人公感溢れる奥の手まで持っている。なお、アリサの固有スキルはもうひとつあるのだが……

「特にこの固有スキル……《孤高のお姫様》って本当になんなの？ 『パーティーメンバーがいけない場合に全ステータス上昇』って……」

学園での二つ名（本人は気に入っていない）に由来した固有スキルを指して、アリサが頬を引き攣らせる。

『ソロプレイ前提のぼっち専用スキルで草』

『芯を突くな』

声に出さず有希にツッコみながら、政近は曖昧に笑う。

「ん〜実際これ、使いどころに困るよな……別にパーティーから外れても一緒に戦うこと自体は出来るみたいだけど、経験値分配されなくなるしMPやSPが見えなくなるから効果的なサポートが出来なくなるし……何より、マーシャさんが使う、パーティー全体回復や全体強化の対象から外れちゃうのがなあ」

「そうよねえ。使えるところがあるとしたら……ダンジョンとかで、分断された時とか？ でも、その状態でHPとか見えなくなったら、それはそれで心配よね〜」

「いや、分断された状態でもパーティー全体を対象とした魔法はある程度距離に関係なく掛かるみたいなので、むしろそういう時こそパーティーは維持した方が……」

「本格的に使いどころがないわね……ま、別にいいけど」

アリサとしても気に入らない名称のスキルは使う気がなかったのか、そう言っただけで肩を竦める。

「まあ、私以外に直接戦える人はいないみたいだし、私が前衛で戦うわ。マーシヤは魔法で支援をお願い」

「りょうかい」

「おお、じゃあ俺は……」

そこで姉妹の視線を浴び、政近はしばし考えてから、グツとサムズアップして言った。

「……応援と、いざという時にアイテム投げるよ！」

「うんうん、応援は大事よね」

「久世君、キャッチボール苦手じゃなかった？」

「ボールじゃなければ大丈夫！」

「どういう自信よ……それに、さっきのポーチに入ってた煙玉？ とか完全にボールだけどっ？」

「じゃあポーション投げるよ！」

「回復役にはマーシヤがいるけど？ というか瓶投げられたら普通にダメージ負わない？」

「すまんアーリヤ、俺には応援しか出来ることがないみたいだ……」

「落ち込まないで、応援は大事よ」

ガツクリと首を垂れた政近の肩を、慰めるようにポンポンと叩くマリヤ。

『ふぎゃ』

その肩に乗っていた有希が、不意打ちの肩ポンに潰れた猫のような声を上げる。が、アリサとマリヤにその声は聞こえず、政近もまたその声をスルーした。

「それじゃあまあ……そういう感じで行きましようか」

そうこうしている間に大門の前に着き、アリサはマリヤと政近に目配せをしてから、町の外へと足を踏み出した。

「おおうすごい草原だなあ」

地平線の果てまで続く大草原を見渡し、政近は感嘆の声を上げる。政近だけでなく、九条姉妹も感動した様子で周囲を見回していたが……不意に、アリサが眉間にしわを寄せて言う。

「でも、ここモンスターが出るのよね？」

「ん……まあ、そうだな」

そう言われて改めて観察すると、どこまでも続く幅十メートルほどの道の両脇は背の高い草が鬱蒼と生い茂っており、そこに何か潜んでいても一見して分からなそうだった。

「しまったな……どんなモンスターが出るのか、情報収集くらいしとけばよかった」

自分の迂闊さを後悔し、なんだったら取って返そうかと政近が考えたところで……五メートルほど先の左側の草がガサガサと揺れ、何か道に飛び出してきた。

「っ！」

「！」

「え、敵!?」

早速初戦闘かと、三人が身構え、飛び出してきたものに目を向け……

『角ウサギだ！ 角ウサギさんじゃあないか!』

「出た！ ゲームでは見たことないのに異世界ファンタジーではやたらと見る序盤の雑魚敵、角ウサギ！」

額から一本角を生やしたウサギを前に、なぜかテンションが上がる有希と政近。ただ

……

「なんか……グラフィック粗くない？」

アリサの言うことはもつともだった。加えて言うなら、だいぶデフォルメされている。

体毛の表現がかなりざっくりしているし、筋肉や骨格の浮き出ている感じもあんまりしない。生き物というより、どこかぬいぐるみっぽい感じがする。その頭上に緑色のHPバーが表示されてるのもなんだかシュール。



「とりあえず、戦うわよ！ いいのよね？」

「あ、ああ……でも、大丈夫か？」

角生えてるしなんか顔立ちも狂暴だとはいえ、相手は一応小動物だ。それを剣で切りつけるというのは、心理的ハードルが高いのではないか……と心配する政近だったが、

「やるわよ……やるしかないんだから！ こんな序盤で、立ち止まってられないわ！」

自らを鼓舞するように力強い声を発したアリサに、政近は息を呑む。そうしている間に、角ウサギがググツと後ろ肢に力を込め、前に出て来たアリサに向かってバツと突進した。

角を突き出し、アリサの体を貫かんと角ウサギが迫る。だが、こと戦いにおいては素人であるアリサは、とっさにその攻撃に反応が出来なかった。

「あ——」

攻撃すべきか防御すべきか、はたまた避けるべきか。

判断が付かず、体の前に剣を構えたまま棒立ちになるアリサ。

そこへ、容赦なく角ウサギが襲い掛かり——アリサが構えた聖剣に、勢いよく突っ込んだ。

「あ」

つという間に、角ウサギの頭にゲームのダメージエフェクトのような斬撃線がビシッと走り、その頭上に表示されていたHPバーが急減少。そのまま色が黄色くなり、赤くなり……「きゅい〜」という断末魔と共に、体が光の粒子と化して消えた。

「……」

なんとも言えない空気の流れる中、政近の視界の隅に獲得経験値が表示され、レベルが一気に三まで上がった旨が表示される。

(序盤の雑魚敵一体で二つもレベル上がるのかよ……流石は獲得経験値十倍)

自身の固有スキルのチートっぷりを実感しつつ、政近はアリサに声を掛ける。

「あ……初勝利、おめでどう」

「……なんだか、戦った気がしないんだけど」

「まあ、うん……ウサギじゃなく、イノシシだったのかもな」

猪突猛進って感じで、と付け加えながら、政近はアリサの顔を覗き込む。

「で……大丈夫か？」

「動物を倒したこと？ そうね……あんまり現実感が無いから、意外と平気かもしれないわ」

「まあ、たしかに」

ぬいぐるみのような、生物感の薄い敵。斬ったところで血飛沫が飛び散るわけでもな

く、死体が残るわけでもない。メニューのアイテム欄を開いたところ、ドロップアイテムらしき素材アイテムがいくつか入っているの、一応生物扱いなんだろうが……そんなところもゲームっぽくて、現実感が無い。

「まあ、どういう仕組みか分からんけど……グロさが抑えられてるなら何よりだな」  
「そうね」

「マーシャさんも大丈夫そうですか？」

「うん、ありがと〜」

マリヤも平気そうなのを確認して安堵してから、政近は一旦町に戻って情報収集することを提案した。それにアリサとマリヤも賛同し、三人は素材の買取なども行っているというギルドに向かい、周辺のモンスターについて情報を集めた。

「主なモンスターは角ウサギに角オオカミ、それとゴブリンか……」

『なんで平地にオオカミがいるんだよ。そして、なんでオオカミとウサギが共存してるんだよ』

「それな。逃げろよウサギ」

有希と一緒にツツコミを入れながら、再出撃。道中、角ウサギや角オオカミが散発的に襲ってきたが、それらはアリサ一人で問題なく対処する。

「ハアッ！」

何度か戦う内に覚悟が出来たのか、アリサが躊躇いなく角オオカミ（これまたなんかぬいぐるみっぽい）に聖剣を振り下ろす。スキルで補正がされているのか、素人とは思えない鋭い斬撃が空を切る。

「ギャンツ」

流石は勇者、このレベルの相手なら聖剣が直撃すれば一撃で倒せるらしく、角オオカミが光となって消えた。が、その光を突っ切るように、角が突き出される。

「アリーヤ！」

「っ、ええい！」

政近の警告で角ウサギの突進に気付き、アリサはとっさに聖剣から右手を放すと、裏拳で角ウサギの角を払いのけた。これにもスキル《格闘術》の補正が掛かっているのか、苦し紛れに放たれた裏拳は、角ウサギの角を半ばからへし折る。

「きゅいい」

すると、角を折られた角ウサギは殴られた勢いそのままに吹き飛び、地面に落下。すぐに起き上がるも、なんだか足取りがおぼつかなく、ふらふらし始めた。

「ん……？ あれ、スタンか？」

「スタン？ 気絶してるってこと？」

「気絶というか……なんか、脳震盪みたいな？」

マリヤにそう答えたところで、政近の頭にひとつの推測が閃く。

（もしかして、角を折った……というか、強打したからか？ 角が頭蓋骨に繋がっているせいで、角を殴られた衝撃がそのまま脳に伝わったとか……？）

もしそうだとしたら、このモンスターは自分の弱点部位を武器にしていることになるわけ……それは、生物として割と重大な欠陥ではないのか。

（まあ、現実世界にも伸び過ぎた牙が頭蓋骨貫通して死んじゃう動物……バビルサだっけ？ とかいたし、ゲーム世界なら尚の事にすることはないか……）

そんなことを考えている内に、そのふらふらしている角ウサギの前にアリサが立つ。

「っ、ええい！」

流石に無防備な敵を攻撃するのは少し躊躇われたのか、アリサは迷いを断ち切るように声を上げると、大上段に振りかぶった聖剣を振り下ろした。

ズンツと勢いよく踏み込まれた右足。ゴウツと空気を切り裂き走った聖剣が風を巻き起こし、アリサの短いスカートが、政近の危惧（期待？）した通りに翻り――

『見せられないよ！』

政近の視線が、どこからか小さな看板を取り出した有希によって遮られた。

「……」

『ふう……いい仕事したぜ』

「ホントにな」

ちっちゃい拳で流れてもいない汗を拭う有希に、政近はジト目でツッコむ。

そして、頬にマリヤの怪訝そうな視線を感じ、思考での会話に切り替える。

『つてか、どっから出したその看板』

『フツ、おいおいマイマスターよ。オレはお助け妖精ちゃんだぜ？ この世界の年齢制限

を守るのも、その役目のひとつなのサ』

『別にパンチラくらいでR18にはならんだろ。というかその言い方、やっぱりこれゲーム

空間なのか？』

『さあね〜？』

くるりんと空中で身を翻し、持っていた看板をどこかへ消すと、有希は政近の肩の上に戻った。肝心なところで役に立たない妹に、政近は溜息をひとつ漏らす。

「久世くん？」

「え？ ああいや…：…そういや、他に人が誰もいないなと」

眉をひそめたマリヤに顔を覗き込まれ、政近はとっさにそう言っただけで周囲を見回す。その言葉に、戻って来たアリサも頷いた。

「たしかに、言われてみたらそうね。この道って、言っただけじゃ王都に繋がる大街道よね？ 普通だったら商人とかが激しく行き来してると思うんだけど…：…」

アリサの言うことはもつともだったが、その指摘に反して周囲には人っ子一人いない。いるのは角を生やしたモンスターばかり。

「……ま、ゲームのバトルフィールドで、無関係なNPCがうろろしてたら邪魔で仕方ないもんな。そういうもんなんだろ」

「やっぱりこれ、ゲームなのかしら〜？」

「さあ？ 夢か集団幻覚的な何かって線が濃厚だと思えますけどね〜」

そんなことを話していると近くの茂みがガサガサと動き、三人はハツとしてそちらへ向き直る。すると、現れたのはお馴染みの角を生やした四足獣……ではなかった。

「あれは、ゴブリン!？」

新たな敵が同時に二匹現れたのを見て、アリサが険しい表情になる。

「あれがゴブリンか……これまた、なんか人形っぽいなあ」

身長一メートルちよつとの、粗末な布をまとった緑色の小鬼。ゴブリンと言われるとんだか不潔なイメージがあるが、その辺りの表現も抑えられているのか、目の前のゴブリンに汚れなどは確認できない。というか……

「ウサギやゴブリンでも思ったけど……こいつら完全にグラ使い回してるよな」

並んで立つ二匹のゴブリンは、まるでコピペしたかのように、全く同じ外見をしている。着ている布の破れ方、持っている粗末な棍棒の凹凸まで、全く同じ。

「つくづくリアリティがないなあ……ま、夢だしな……」

そう独り言ちながらも、政近はアリサの背に声を掛ける。

「大丈夫か？ 一体受け持とうか？」

「問題ないわ。魔法使えない後衛は下がってなさい」

「つらっ……事実だけど」

肩を落とす政近の前で、アリサが「ええい！」と声を上げながら左側のゴブリンに切りかかる。

ゴブリンも、棍棒を掲げてそれをガードしようとするが……体格も武器も圧倒的に優位な上、重力まで味方にした大上段からの振り下ろしを、その程度で防げるはずもなく。

「ギャアー！」

ゴブリンの上半身にビシッとダメージエフェクトが走り、安っぽい悲鳴を上げながらその体が消滅した。が、そこで予想外のことが起きた。

「ギャギャツ」

「あっ」

残ったもう一体のゴブリンが、なんとアリサを無視して後衛に向かったのだ。

一体を切り伏せた後、続けて逆袈裟に切りつけようとしていたアリサは、その動きに意表を衝かれてしまう。そして、それは政近も同様だった。



「おっ……!?」

これまでの戦闘で全く出番がなかったことで、知らずに緩んでいた緊張。それを引き締め直すまでの、一秒弱。その間に、もうゴブリンはすぐそこまで迫っていた。

(っ、マーシャさんを護らないと——!)

素早くマリヤを背後に庇い、政近は身構える。

(魔法……は使えないし、肉弾戦? とりあえず蹴——いや俺は後衛職だしでもそんなこと言ってる場合じゃ空手で戦うでも手が本邪魔——)

刹那の内に拳で迎え撃つことを決断するも、右手が魔導書で埋まっていることに気がつき、そうこうしている間にゴブリンが棍棒を振り上げ——

「ふんっ!」

とっさに政近は、その顔面に魔導書を振り下ろした。

ゴツという鈍い音と共にゴブリンの顔面にバシーンとダメージエフェクトが走り……HPが呆気なく吹き飛び、その体が消滅する。

「……」

「あら久世くん先生みたいね」

「マーシャさんの中で先生のイメージどうなってますか」

どこかずれたマリヤの感想にツッコみ、政近は顔を上げてアリサの方を見る。そして、

こちらに駆け寄ろうとした体勢のまま固まっているアリサに、フツとクールな笑みを浮かべて言った。

「魔法とは、本で殴ることと見付けたり」

「絶対違うわよ」

アリサの指摘はもつともだったが、実際有効だった。それもこれも、固有スキル《獲得経験値十倍（球技を除く）》の効果がデカイ。

この世界では、戦闘の貢献度に関わらず経験値はパーティー内で等分されるようだが、政近の固有スキルはその等分された経験値を自分の分だけ十倍するようなのだ。

その結果、後ろで見てただけなのに、仲間二人を差し置いて急激に上がったレベル。後衛職でありながら、前衛職のアリサ以上に高くなつた筋力や素早さや耐久力のステータス値。そこへ武道の経験と決して破損しない鈍器魔導書が加わつた今の政近は、現時点でアリサよりもずっと強い近接戦闘力を手に入れていた。

「とういわけで、俺前衛やるわ」

こうして、前代未聞の「魔法が使えない撲殺賢者」が爆誕したのであった。



「ふんっ、ふんっ！」

「……」

「久世く〜ん頑張つて〜」

飛び出してくるモンスターに、躊躇いなく魔導書を振るう賢者。その後ろを付いて行く勇者と聖女。

政近の常識で考えるなら、不意打ちされた時のために、打たれ強い前衛職であるアリサが先頭に立つべき。もっと言えば、斥候職を雇って先行させ、前方の安全を確認すべき……なのだが、特にそういったことはしていない。というか、する必要がないと分かった。

なぜならこの世界、どういうわけだかモンスターが一切不意打ちを仕掛けてこないのだ。角ウサギだろうが角オオカミだろうがゴブリンだろうが、必ず一回前に飛び出してくる。側面から襲い掛かってきたり、草むらの中から石を投げてくるようなことはしない。必ず前に出て来て、ご丁寧に威嚇なのかエンカウト演出なのかよく分からない鳴き声&ポーズをしてから、戦闘態勢に入るのだ。

「あ、また敵……」

ちようどそこへ飛び出してきた三匹のゴブリンが、横一列に並んで「ギャギャツ」と鳴き声を上げながら棍棒を振り上げる。その一糸乱れぬ動きは、なんとというか……あまりに

も行儀が良過ぎて、この世界のモンスターは雑魚に至るまで決闘を重んじる騎士道精神が浸透しているのかと疑ってしまうような光景だった。もつとも……

「はいはいお疲れっと」

そんな精神はこの世界の住人ではない勇者一行にとつては知ったことではないので、政近たちはガンガン不意打ちを仕掛けるし、威嚇中の相手にも平気で先手必勝かますのだが。

ゴブリンの威嚇をサラツと無視し、その額に鈍器魔導書を埋め込む政近。固有スキル《獲得経験値十倍（球技は除く）》によって、レベルとステータスがこのエリアの適正値を大きく上回っている政近の一撃により、哀れなゴブリンはあえなく光の粒子となって消える。

『ヒュ〜♪ さっすがマスター！ その容赦のなさに痺れる憧れるう！』

小悪魔有希が囁し立てるのを無視し、政近は再度本を振り上げる。が、仲間が無慈悲な攻撃で散ったというのに。その一撃が、今度は自分に降りかかろうとしているということに。残りのゴブリンは、「まだ威嚇をしている最中でしょうがあ！」とブチギれるようなこともなく、きつちりと一通りの威嚇を終えてからようやく戦闘態勢に入る前に、そのこめかみにゴスゴスツと魔導書がめり込んだ。

「「ギャアー！」」

もはや棒読みのようにも聞こえる悲鳴を上げ、光と散るゴブリン。そちらを見もせず、

背後から向けられる何か言いたげな視線にも気付かないふりをしながら、政近は視界の端に表示される獲得経験値とお金を機械的に確認する。

「それじゃあ、行きましようか」

そうして、脳筋賢者による戦いとも呼べない一方的な蹂躪を繰り返しながら、勇者一行は先へと進む。そして、あつという間に次の町に着いた。

「……いや、おかしくね？」

「絶対、こんなに歩いてきてないわよね……」

背後の広大な草原を振り返りながら、政近とアリサは冷静にツツコミを入れる。

体感で一時間ほど前に出発した王都は、もう地平線の果てに隠れて見えない。そう、体感一時間である。見渡す限りの大草原を徒歩で進んでいたはずなのに、気付いた時にはもう踏破していた。それこそ、いつの間にかレポートでもしたのではないかと思うほどに、光景が飛んでいる。あるいは……

『エリチェンしたな』

「やっぱり？」

「？ 何が？」

「いや、エリチェン……エリアチェンジしたんじゃないかなって。草原エリアを踏破したって判定されて、次のエリア……というか町に飛ばされたのかなあ、と。そう考える

と、さっきのゴブリンと角オオカミの集団。あれがボス扱いだったのか……？」

解説を加えるが、あまりこういったゲームのプレイ経験がないらしいアリサは、眉根を寄せて首を傾げるのみ。そこへ、マリヤがピンと人差し指を立てて言う。

「ほら、舞台のお芝居とかでも、背景がガラツと変わって急に場面転換するじゃない？ それと同じ感じじゃないかなあ」

「いや、それはまた話が違うような……」

「ああ、少し分かった……かも」

「分かるのか……」

マリヤの独特な例えに、なぜか納得を示すアリサ。それを微妙に釈然としない表情で見ていると、有希が両腕を組みながらうんうんと頷く。

『サクサクプレイ、素晴らしい』

「サクサクプレイ過ぎるだろ……いやまあ、ゲームとかでも序盤の方はすぐ次の町に行けるし、作品によっては十時間くらいでメインストーリークリア出来ちゃうけどさ……冷静に考えればあれもおかしな話だよなあ」

広大な世界を冒険しているはずなのに、数時間で旅が終わってしまうとは明らかにおかしい。それだけ、いろんなところで移動時間がカットされているということなのだろうか

……

「こうして体感してみると……本当にご都合主義というか、違和感の塊だったんだなあ、ゲームの世界って」

「お城の人は、魔王城までは七つの町を経由するって言ってたわよね？ この調子なら、一日掛からずに魔王城に着けちゃうんじゃない？」

「まあ、最初のエリアってことで特別難易度が低かったのかもしれない……それに、流石に夜になったら町に泊まらないといけないでしょうから、一日でつてことはないと思います……」

そう言ってから、政近は「泊まったところで、そもそも眠れるのか疑問ですけど」と付け加える。

ちなみに、正確には町と呼べるのは四つ目までで、それ以降は城塞や砦という形になるらしい。四つ目の町が国境に接しており、そこから先は人間の支配が及ばぬモンスターの領域。そして、魔族との戦場になるというわけだ。

「まあとりあえず、陽が沈む前に行けるところまで行きましょうか」

「そうね」

「はい」

なるべく先を急ぐという方針の下、三人はドロップアイテムの換金とアイテムの購入だけをすると、早々に町を出て次の町を目指した。それから……体感約七時間。

特に大きな問題もなく順調に魔導書で蹂躪（物理）しながら二つ目の町、三つ目の町を通過し、四つ目の町が見えてきたところで……政近たちの快進撃は止まった。

「うおおお!?」

頭上から振り下ろされる長大な金棒を、サイドステップ……するような余裕はなく、必死のダッシュで避ける。

表面にゴツゴツと棘スパイクの付いた、長さ三メートル太さ五十センチ程の棍棒は、鈍い衝撃音と共に地面を揺らす。直撃したらぺしゃんこどころかバラバラになりそうなその迫力に、政近の背筋にゾツとしたものが走る。

「いやいや怖過ぎ！ リアル鬼に金棒じゃん！ いきなり難易度が上がり過ぎだろおお!?」  
左右を絶壁に挟まれた、枯れ谷の出口。そこに陣取る、赤黒い肌の身長五メートルはありそうな単眼鬼サイクロプスを前に、政近は堪らずに叫んだ。その大声に反応したのか、金棒をゆつくりと持ち上げたサイクロプスの巨大な単眼が、ぎよろりと政近を睨み据えた。

「げ」

「ガアアアアアア！」

「うひい!?」

斜め上から振り下ろされた金棒を、政近は情けない声を上げながら地面に身を投げ出すようにして避ける。



頭上を大質量が通過する、ゴウツという音。それと共に背中を叩く風圧に肝を冷やしなから、政近は転げるようにサイクロプスから距離を取る。

そうして十分間合いの外に出たと判断したところで、ガバツと起き上がってサイクロプスの方を確認し——金棒から片手を離れたサイクロプスが、開いた左手をこちらに向けているのを見て、嫌な予感がした。

「まさか……」

その予感を肯定するように、サイクロプスが巨大な牙の突き出した大きな口を開く。

フアイアホール  
「火球」

まるでマンホールの底から響くような、陰々としただみ声。それを追うようにボアツと空気が爆ぜる音がした……時には、政近は既に駆け出していた。

「魔法、使うのかよお!? しかもなんで英語!？」

『魔族の魔法は人間の魔法と違うんじゃないかね? 知らんけど』

「お前は気楽でいいよな!」

他人事な有希にそう叫び、ローブのフードを深くかぶって頭を保護しながら、全力ダツシユする政近。その背後で火球が炸裂し、熱波がローブの背中を灼く。

「うおお!？」

背中にじんわりとした熱を感じるも、視界の右端に浮かぶHPバーに変化はない。恐ら

く、このロープとマリヤが掛けてくれた結果が、熱ダメージを防いでくれているのだらう。

「えええい！」

そこで響いた叫び声に目を向ければ、政近に魔法を放ったサイクロプスに、アリサが切りかかるところだった。

しかし、脛の辺りを切りつけようとしたアリサに対し、サイクロプスは素早く脚を引くことであっさり回避してしまう。

「あっ、とと？」

文字通り空を切ったアリサが、体勢を崩してよろめく。そこへ、サイクロプスが無造作に金棒を振りかぶった。

「【防壁】！」

後方から響いた、マリヤの鋭い声。直後、アリサとサイクロプスの中間に光の壁が出現し、サイクロプスの一撃を見事に弾いた。その反動で、サイクロプスがよろめくように数歩後退る。明らかに攻撃チャンスだったが、しかし巨大な足がズシンズシンと地面をスタンプする光景に、アリサも政近も迂闊に踏み込めない。下手に近付けば、あの足にぶちつと踏み潰されてしまいそうで。結果、数秒の膠着状態が生まれる。

「いや……これ、絶対後衛が機能してること前提にしてるだろ」

政近がそう呟くのも当然。このサイクロプスは、今までの敵とはあらゆる意味で別格だった。

まずその巨体。これまで戦った中で一番デカかった敵は、ひとつ前のエリアのボスだった巨大虎。あれも体長四メートル以上あったが、所詮は四足獣。噛みつき攻撃の際には弱点の頭部が目の前に来るので、まだ戦いやすかった。

一方、サイクロプスは完全な二足歩行。政近の頭の位置にサイクロプスの膝が来るようなサイズなので、頭部どころか心臓にだって武器が届かない。おまけに武器を持つてる上に魔法まで使う。

(こういう奴は目が弱点つてのがお約束だが……届かねえし。どう考えても、重装備で固めた盾役が抑えている間に、遠距離攻撃で目を狙うパターンだよな……つて、ん？ 遠距離攻撃?)

そこでふと気付き、政近は思わずアリサの方を見る。と、そのタイミングで体勢を立て直したサイクロプスが、両腕を振り上げて咆哮した。その視線が後衛……魔法によって自分の一撃を弾いたマリヤに向かうのを察し、政近は瞬間的に覚悟を決める。

「アーリヤ！ マーシャさんを護りつつ、魔法であいつの目を狙ってくれ！ 俺がこいつを引き付ける！」

「え……」

「遠距離攻撃持ってるのお前しかいないんだ！ 頼む！」

言うが早いのか、政近はアリサの返答を待つことなくサイクロプスの前に身を躍らせた。

「っ、来いよ……俺が相手だ！」

金棒を振り上げ、ズンズンとこちらへ駆けてくるサイクロプスを前に、政近は歯を食いしばって必死に恐怖を抑え込む。

（大丈夫だ、落ち着け……俺には、獲得経験値十倍がある！ 今の俺のレベル、ステータスは、こいつに挑む適正値を大きく上回ってるはずだ！ 加えてこいつは純粹な戦士タイプじゃない。魔法を使う以上、近接戦闘力は純粹な前衛に比べれば低い！ つまり、どんなに体格差があろうが、ただだけ見た目の威力がすごかろうが……）

数値上は、正面から殴り合える！ はず！

半ば自己暗示を掛けるようにして自身を鼓舞し、政近は腰を落とすと、魔導書をグツと握り締める。そして、

「ガアアアア！」

「うおおおおお！」

サイクロプスが振り下ろした金棒に向かって、思いつ切り魔導書をぶち当てた。

邪魔な障害物を払い除けるように、横薙ぎに振るわれた金棒。迫る凶悪な形状の金属塊に、ピッチャーのサイドスローのような動きで力任せに魔導書を叩きつける。

その接点で発生した衝撃は、これが現実であれば、容易く政近の右腕を複雑骨折に追い込んだだろう。だが、この世界のおけるダメージ計算は、さながらカードゲームのような単純な計算式で行われる。つまり、攻撃と攻撃がぶつかり合った時。より大きなダメージを発生させた側が、その超過分だけ相手にダメージを与え、そこから相手の防御力を引いた数値が実際のダメージとなるのだ。極論、巨大な金棒で殴られようがドでかい隕石をぶち当てられようが、それを上回る勢いで殴り返せばダメージは受けないのである。果たして、

「ぶツツ飛べええ！」

政近が魔導書を振り抜くと共に、サイクロプスの金棒が大きく弾かれ、その頭上に表示された二本のHPバーの下段がわずかに削れた。一方、政近のHPバーは満タンのまま。

「ふ、はーっはっはっは！ どおーだ経験値チートの力は！ 攻撃こそ最大の防御！ 盾役なんて不要！ この撲殺賢者様が、殴りタンクつてもものを見せてやるよお！」

内心ビビっていたのを隠すように、ここぞとばかりに虚勢を張る政近。少し声が裏返ってしまっただのはご愛敬だ。

『声裏返ってて草』

「うるせえ」

見逃してくれない妹に小声で返しながら、政近は魔導書を構える。サイクロプスもま

た、軽く吹き飛ばすつもりだった相手の予期せぬ反撃に、視線をマリヤから政近へ移した、瞬間。

「【大鏃】！」

アリサのロシア語と共に、鏃のような形状をした岩が政近の背後から放たれた。

『おゝすごつ、砲弾みたい』

有希が感心したように見上げる中、しかし砲弾とは程遠い緩慢な速度で飛んだ岩に、サイクロプスはすぐに反応。軽く首を傾げるだけで避けてしまう。

「あ、外しちゃ——」

「いや、そのまま続けてくれ！ さっきは目を狙えて言ったが、もつと広い範囲でいい！ 俺が一撃入れる度に頭の辺りに撃つてくれ！」

「つ、分かったわ！」

「マーシャさんは、こいつがそっちに向かいそうになったら防壁で足止めしてもらえますか？ あと魔法にも注意を！」

「あ、うん！」

二人に指示を出しながらも注意深くサイクロプスの様子を窺っていると、幸いサイクロプスの単眼はぎよろりと政近の方を向いた。アリサの魔法が当たらなかつたこともあるだろうが、まだサイクロプスの中では政近の方がヘイトが高いということだろう。

（ゲーム的に考えるなら……モンスターのヘイトを稼ぐ行為は、ダメージを与えることと、回復をすること、か？ 挑発系のスキルがあれば、手っ取り早くヘイトを稼げるんだらうけど……）

残念ながら盾職ではない政近は、そういったスキルを持ち合わせていない。こうなると、ヘイト値の管理はグンと難しくなる。

「ま、回復アイテムも使いつつ……なんとかやるしかないよな！」

そう声に出して宣言し、政近はサイクロプスの単眼を睨み返した。そうして、凄まじい威圧感と共に迫る金棒に肝を冷やしながらも、魔導書で強引に叩き返す。

そこからは、ある程度パターン化した攻防が続けられた。

リーチの問題でこちらから攻撃を仕掛けることが出来ないの、とにかくサイクロプスの攻撃を迎撃することに専念する政近。一人が打ち合う度に、サイクロプスの頭部に向かって魔法を撃つアリサ。サイクロプスが魔法を使う度に、それを防衛するマリヤ。

互いに決め手に欠け、これは長期戦になりそうだと政近が覚悟したところで、思わぬことが起きた。

「ギユアアアア!!」

「え——」

アリサが放った、水属性魔法。大きな水の塊をぶつけるだけの、そこまで威力は高くな

い魔法だ。アリサも膠着状態を何とかしようとして、苦し紛れに放った魔法だったのだろうか……水がサイクロプスの体表に触れた途端、ジュワアアという音と共に煙が上がったのだ。

「な、なに……？」

「そうか、弱点属性か！ こいつ、水に弱いんだ！」

考えてみれば、火属性魔法を使う上に赤黒い肌とくればお約束ではあった。今まで気付かなかった自分の迂闊さに歯噛みしながら、政近は急いで前に走ると、痛みに悶えるサイクロプスの右脛に思いつ切り魔導書を叩きつける。そうして素早くバックステップで距離を取ってから、後ろのアリサに呼び掛けた。

「よし！ こっからは水属性魔法で攻めてくれ！ あんまりやり過ぎるとそっちにヘイトが向くから、ほどほどにな！」

「分かったわ！」

このことをきっかけに、戦いの趨勢は一気に傾いた。どうやらサイクロプスの肌は水に触れるとダメージを負うだけでなく、耐久力も落ちるらしく、政近の近接攻撃でも一気にHPを削れるようになったのだ。しかも水を浴びる度に毎回怯み行動が入るので、こうなってしまうともはやハメ状態だった。

アリサが水属性魔法で攻撃し、怯んでいる間に政近が魔導書で殴り、怯み行動が解ける



と同時にアリサが魔法を当てる。その繰り返し。

「いや、パターン入っちゃえばこいつ雑魚ボスだな？」

なんだかいじめみたいになって、若干悪感を刺激されながらも、政近は怯んだサイクロプスの脛に、何度目になるか分からない打撃を叩き込む。

ガンツ

そして、その手応えに違和感を覚えた。

「ん？　なんか硬——」

「久世君！」

「下がって！　何か——」

背後から聞こえた、姉妹の警告。その理由は、政近にもすぐ分かった。

すぐ目の前に聳える、サイクロプスの赤黒い脚。それが一気に青く変色し、体毛がふわっと逆立ったのだ。

（やばっ——）

異変に気付くと同時に魔導書を引き戻し、とつさに飛び退く……が、一步遅かった。

「ガアアアアアア!!」

耳を弄する雄叫び。その声に視線を上げると、全身青黒く染まったサイクロプスの額の角に、バチバチと不穏なエフェクトが。

まさか、と思う間もなく。角から放たれた雷撃が、サイクロプスを取り囲むように全周に降り注いだ。そして、政近はあと少しというところで、その範囲内に巻き込まれた。

「ガッツ」

体の中心を、なんらかの衝撃がバババツと走り抜ける。同時に、全身の感覚が遠ざかった。

(マズ、い……麻、痺……！)

足で着地することも出来ず、飛び退いた勢いそのままに背中から地面に倒れ込む。その過程で見えたサイクロプスのHPバーは、下段がキレイに消し飛び、上段も残り半分となっていた。

(クソ、しまった……残りHPが四分の一になると、属性変化を起こすのか！)

恐らくこの全周への雷撃は、モード以降に伴う確定行動。張り付いていた近接職をまとめて麻痺させる、初見殺しの特殊攻撃だ。

「【浄——】」

パーティーメンバーが状態異常に陥るといふ初めての事態に、マリヤが数秒遅れて詠唱を開始する。だが、ほぼそれと同時に、サイクロプスがマリヤに向かってスツと右人差し指を向けた。

そして、その大きな口がゆっくりと開くのを見て……ここでマリヤは、致命的なミスをする。

犯してしまった。

「【防——】」

魔法攻撃が来ることを察して、マリヤはとつさに詠唱を切り替えてしまったのだ。

『呪文を唱える際には、正確に発音をしないと魔法が暴発する危険性があるのでお気を付けください』

王城で伝えられた忠告を、すっかり忘れて。その結果、

「あっ!？」

聖杖の先でパチンツと光が弾け、唱えかけた魔法は両方不発に終わる。その反動でマリヤが硬直している間に、サイクロプスの魔法が発動した。

「電撃<sup>ブリッツ</sup>」

空気が破裂するような音と共に、サイクロプスの太い指から迸った雷が、マリヤに迫る。と、その間にアリサが立ち塞がる——が、これもまた致命的なミスであった。

「うあっ!」

全身に走った衝撃に、しかし流石は勇者と言うべきか、アリサは崩れ落ちることなくグツと踏ん張る。が、

「あっ!」

魔法の雷はそのアリサを貫通し、背後のマリヤにも襲い掛かった。そして、耐性の問題

かそれとも運が悪かったのか、マリヤは政近と同様に麻痺を喰らって倒れてしまう。

(マズい……！)

仰向けに地面に倒れたままその光景を目撃し、政近の全身を危機感が駆け抜けた。

パーティメンバー三人中二人が麻痺。残る一人も軽い硬直状態。アリサが無事なら、アイテムでマリヤを回復し、マリヤの魔法で政近を回復させることが出来ただろう。だが、雷属性魔法に貫通効果があることに気付かず、アリサが自ら巻き込まれに行ってしまったことで、その可能性は途絶えた。こうなっては、続くサイクロプスの攻撃を防ぐ手立てがない。

エンチャント サンダー  
「属性付与・雷」

そこへ、政近の危機感を更に煽る、不吉な詠唱が。見れば、サイクロプスの握る金棒がバチバチと激しく放電している。

「っ！」

武器に属性を付与し、攻撃と同時に属性による追加ダメージを与える魔法。これでは先程と同じように魔導書で迎撃しようとしても、電撃ダメージと麻痺を喰らうだろう。

(頼む……せめてこっちに……！)

そんな政近の祈りも虚しく、サイクロプスはアリサとマリヤに視線を向けた。そうして、雄叫びを上げながら猛然と突進を開始する。

『起きろ！ もう麻痺解けてんぞ！』

「!!」

それと同時に有希の叫びが脳内に響き、政近は素早く跳ね起きた。

そうして、数瞬遅れでアリサとサイクロプスの間に割り込むべく、走り出すが……

「クツソ！ 間に合わ、ねえ！」

ステータス上の素早さでは政近が上回っているだろうが、いかんせん歩幅が違い過ぎる。とても、前に回り込むだけの余裕はない。出来るとしたら精々、横から追い抜きざまに一撃を加えるくらいだろう。それも、あの硬い体表にどれだけ有効かは分からない。

（どうする？ 何か、何かないか？ あいつの足を止める、何か効果的な攻撃は……!）

必死に思案する政近の脳内に、再び有希の声が響く。

『落ち着けマスター。角ウサギやゴブリンと戦って分かったろ？ この世界のモンスターにも、生物としての急所は存在する。角を殴れば脳震盪を起こすし、喉を殴れば咳き込む。つまり——』

「!」

瞬間、政近は閃いた。そうして、サイクロプスの左側を追い抜くように走りながら、全神経を集中させて機を窺う。

巨大な左足が、踵から地面に着地する。グツとしっかり地面を踏みしめ、爪先立ちにな

り、後ろに蹴り上げられる。

(こ、こ……)

蹴り上げられた足が減速、静止し、勢いよく前に蹴り出され——

「だ！」

前に蹴り出された左足が、地面すれすれを通過する瞬間。政近は、その小指の先端目掛けて思いつ切り魔導書を振り抜いた。

「食らえ！ 箆笥の角には気を付けましょうアタアツク!!」

ガツンという鈍い音が谷間に響き渡り、サイクロプスがアリサの数メートル手前でつんのめる。

足の小指の先への痛打。これをやられた人間が取る行動など、古今東西変わらない。即ち、

「グアアア!?!」

手・で、ぶ・つ・け・た・小・指・を・押・さ・え・る・の・で・あ・る。

果たして、サイクロプスもまた、数歩きこちなく歩いた後、蹲るようにして左足を手で包んだ。が、そこは既にアリサの間合いである。

「ハアア！」

目の前に下りてきた巨大な眼球に向かって、アリサは腰だめに聖剣を構える。そして、

技名発声と同時に勢いよく剣を突き出した。

「岩穿ち！」

武技の発動を示す淡い光（バトルオーラというらしい）が聖剣を包み、突き出された勢いそのままにサイクロプスの眼球を貫き、後頭部まで突き抜ける。その頭上に浮かんでいたHPバーが一気に赤く染まり、呆気なく消し飛んだ。

「ゴアアアアアー!!」

ボスらしく派手な断末魔を上げながらサイクロプスが身をよじり、フツと力なく地面に倒れ込む……途中で、光となって消えた。直後、視界の隅に獲得経験値と、レベルが一気に四つ上がった旨のメッセージが表示される。

「やつ、たあああ……危あつぶなかつたあ……」

そちらを確認し、政近は安堵からその場にしゃがみ込んでしまった。

結果だけ見れば、三人共この戦闘でほとんどダメージは負っていない。HPは常に八割以上をキープしていたし、完勝と言ってもいいだろう。だが、危なかつた。最後は、もう戦線が崩壊していたと言っても間違いない。あのまま戦闘が長引いていけば、態勢を立て直せないまま誰かが脱落していてもおかしくなかつた。

「あく怖かつたあ……ごめんね？ わたし、魔法ミスしちゃった」

「いや、油断してた俺も悪いんで……」

「私も、とっさに雷の前に飛び出しちゃったわ……あれは、マーシャを突き飛ばして回避しないといけないところだったわね」

「あの状況でとっさにその判断が出来ないのは仕方ないって。むしろ、あそこからよくトドメまで持ってってくれたよ」

「うんうん、後ろで見てたけど、アーリヤちゃんすっごくかっこよかった！」

「ありがと……あなたも、よく足止めしてくれたわ。……あの技名はどうかと思うけど」  
「ちよっ、それは言うな」

反省しながらも、三人はお互いの健闘を称え合う。

「そもそも技名で言えば、お前も人のこと言えないだろ？」

「言わないでよ……仕方ないでしょ？ スキルなんだから」

「ま、慣れれば技名ボイスコマンド発声なしで発動できるらしいけど……というか、技名日本語だったら俺も使えるんだよな。なんで俺には近接戦闘用のスキルが生えないのか……」

「わたしもそういうのは一切ないわね。職業によって、覚えられるスキルが決まってるのか？」

「その可能性が濃厚ですわ……って、そうだ！　なんで魔族の魔法は英語なんだよ！　英語なら俺だってまだ使えそうなのに！」

「ネイティブレベルの発音、出来るの？」



「……そう言われると少し自信ないけどさ」

そんなことを話しながらゆっくりと枯れ谷を抜け、遠くに見えてきた新たな町へと向かう。

「で、すぐ辿り着くと」

「思いつ切りワープしたわね……」

「あはは……やっぱり変な感じよね」

気付けば巨大な門が目の前にあり、三人は揃って微妙な笑みを浮かべる。しかし、もう気にしても仕方ないと、構わずに門を潜ろうとしたところで、急に門番に声を掛けられた。

「あんたら、国境を越えるのかい？ だったら、魔獣屋で騎獣を買った方がいいぜ」

「機銃？」

『この世界観でマシンガンは流石にワロタ』

「アーリヤ……なんか勘違いしてる気がするんで言うておくが、騎乗する獣で騎獣だと思うぞ？ ファンタジー世界だし、馬以外の乗り物があるんだろうよ」

「あ、そ、そういう……」

アリスが恥ずかしそうに肩を縮めるのを横目に、政近は門番から詳しい話を聞く。「俺達、この先の城塞に向かうんですけど……そんなに遠いんですか？」

「ん？ そんなことはないが……人間の足じゃああの山道は大変だぜえ？ それに、騎獣がいれば旅がぐんと楽になるしな！」

「なるほど」

この世界では、角ウサギや角オオカミのような獣型のモンスターは魔獣、ゴブリンやオークのような人型のモンスターは魔族と呼ぶらしい。後者が調教<sup>テイム</sup>できないのに対し、前者は出来るそうなので、魔獣屋というのは恐らくタイムした魔獣を販売する店なのだろう。

「ちなみに、その魔獣屋というのはどこに……？」

「ああ、そりゃ——」

そして親切な門番から道順を聞き、とりあえずそちらに向かつて歩き出す。

「ここで移動手段入手か……まあ、こっから後半戦に入るみたいだし、乗り物で機動力向上っていうのはお約束ではあるか」

政近がそんなことを独り言ちたところで、アリサよりはファンタジーに造詣があるらしいマリヤがふわーっとした笑みを浮かべた。

「わたし知ってる〜おっきな鳥さんとか、ちっちゃい恐竜みたいなのに乗って進むのよね〜？」

「ちっちゃい恐竜？ それは……大丈夫なの？ 噛まれたりしないの？」

「いや、そんなことはない……と思うけど、そうか。リアルだったら、タイムしたモンスターに攻撃されるってこともありえるか……」

門外漢だからこそその素朴な疑問に、政近は思わず「その発想はなかった」と感心する。

「でもまあ、そこはなんらかの安全装置が付けられてるんじゃないか？　魔法で主人を傷付けないよう命令されてるとか……」

「なんだか、それはそれで複雑だけれど……」

「ん……まあ洗脳されてるみたいなものだしな……だったら、なるべく安全そうなやつを選ぶか？　別に騎獣に戦闘力は期待してないし」

「そうそう、どうせなら可愛い子がいいなあ。でっかい猫ちゃんとか！」

「それはそれですごく乗りにくそうですけど……って、そもそも俺、馬でも乗れるか怪しいんだけどな？」

「言われてみれば……わたしとアーリヤちゃんも乗れないわね？」

「うーん、それに、仮に乗れたとして、その状態で山道を走破できるとは思えないわ」

そもそもその問題に気付き、政近たちは立ち止まって顔を見合わせる。しかし、あれだけ分かりやすく前振りをされた上で、魔獣屋に行かないという選択肢はゲーム的にありえない。

「……まあ、実物を見てから決めればいいだろ。それこそ、初心者でも絶対に落ちない魔

法の鞍みたいなアイテムがあるかもしれないし」

「そうね」

「おつきな猫ちゃんいるかなあ」

「……冷静に考えると、マーシャさんが求めているのは世に言うライオンでは？」

そんな会話をしながら町中を歩いていると、目当ての魔獣屋が見えてくる。門番にはザックリとした道順しか聞いていなかったが、見逃すようなことはなかった。なぜなら他の建物がただの背景のように印象がぼんやりとしている中、その建物だけなんだか輪郭がはっきりしていて、明らかに浮いていたから。

「ギルドとかでも思ったが……ストーリー上で重要な建物だけグラフィックのクオリティが違うっていうのは、なんか変な感じだなあ」

「……そこはもう、気にしないようにしましょう」

微妙な顔をしながら建物に入り、これまた他の有象無象の住人と違って明らかに描き分けがされているひげ面の店主に声を掛けると、建物の裏口に案内される。そこから外に出ると、木造の巨大な厩舎が建っているのが見えた。

「騎獣はあの中だ。気性の荒いのもいるから、迂闊に手は出すなよ？」

「あ、はい」

そう答えながら、政近は周囲をキョロキョロ見回して、首を傾げる。

「（……冷静に考えると、なんでこんな町中に？ 魔獣が衰えないように走り回らせるスペースもないし、もし万が一魔獣が逃げ出したらどうするんだ？）」

「（あ、たしかに）。普通ならもっと郊外の、広い牧場みたいな場所が相応しい気も？」

「（……その辺りも、もう気にしないようにしましょう）」

違和感をビシビシ感じつつも、政近たちは厩舎に入る。すると、もうそんな小さな疑問など、一瞬で気にならなくなった。

「うおおっ、すごい！」

「きよ、恐竜!? 本当に恐竜っぽいものいる！」

「うわあ、本当にこの子達に乗れるのおく？ すごい！」

厩舎の中には、馬型の魔獣に始まりダチョウのような鳥型の魔獣、そして中には小型の肉食恐竜のような魔獣の姿もあった。

「……これ、一緒に飼育して大丈夫なのか？」

新たに生まれた疑問に蓋をして、政近たちはお上りさんのように周りをキョロキョロと見回しながら、厩舎の中を進む。

「持久力で言えばなんとと言っても馬型だな。悪路の走破力という点では、鳥型や山羊型がオススメだ。走竜型は戦闘でも役に立つが、エサが大変で鳴き声がうるせえのが難点だ

なあ」

そんな店主の説明を聞きながら、政近は近くで水を飲んでいた馬型の魔獣に何気なく手を伸ばす。

「……こうして見ると、やっぱり馬型の安心感がすごいな……なんか角生えてるけど」

伸ばした手をぶいっと首を振って避けられ、苦笑していると、それをまじまじと見ていた有希が言った。

『とうか……こいつユニコーンじゃね？ 色白いし』

「え？ ああ、言われてみれば……」

ここまで角の生えたウサギやらオオカミやらを見てきたせいで、少し麻痺していたのかもしれない。しかし言われてみれば、角の生えた白い馬と言われればそれはユニコーンだ。もつとも、これはあくまで元の世界の基準だが。

「わくキレ〜イ」

「こんなに真つ白な白馬、初めて見るわね……」

同じ魔獣を見て、マリヤとアリサが感心した声を上げる。すると、政近の時とは打って変わって、白い角馬は人懐っこく二人に顔をすり寄せた。

「……」

『この扱いの差……やっぱりこいつユニコーンじゃね？ ……ん？ ってことはあの二人

……え、マーシャさん彼氏持ちなのにな？」

「ゲスイ勘繰りすんな！ あれはただの角が生えた馬だ！ それだけだ！」

鋭く叫びながら、無駄と知りつつ有希にチョップを入れる。すると、アリサが怪訝そうに政近の方を見ながら角馬から離れた。

「ん〜でもやつぱり、これだけ大きいと少し怖いかしら……私は、この山羊型のサイズくらいが安心できるわ」

「それはそうかもね〜。う〜ん、猫ちゃんはいないのかしら〜？」

この期に及んで、マイペースに大きな猫を探し出すマリヤに、政近は苦笑する。

「見た感じ、猫はいなさそうですが……」

「う〜ん、だったらおっきいワンちゃんでもいいんだけど……」

「だからそれは世に言う狼では……」

ツツコミを入れながら、政近が何気なくひとつの馬房（？）を覗き込むと——ワンちゃんが、いた。

ただし、犬の耳としっぽを生やした、人間だが。

地面に敷かれた藁の絨毯の上に、サラッと世界観をぶち壊す段ボール箱を置き、その中にちよこんと腰掛けた獣人（？）の少女。その首から、これまた世界観ガン無視の小さなホワイトボードを掲げており、両手で持ったそこには日本語で「拾ってください」という

文字が。というか……どっからどう見ても、

『綾乃じゃねえか』

そう、有希の言う通り綾乃だった。だってメイド服着てるし。なんか妙に露出度過多でおへそ出てるけど。

「……何やってんのお前」

人身売買、というにはあまりに緊張感がない……というか脱力感しかないその光景に、政近はガクツと膝を折りながら問い掛ける。すると、綾乃(?)は無言無表情のまま、手に持ったホワイトボードをフリフリと上下させてアピール。拾ってください、と。

「いや、それを言うなら買ってくださいじゃ——」

「ん？ ああいや、そいつは売り物じゃないぞ？」

「は？」

振り向けば、いつの間にか近くに来ていた店主が、少し困ったような顔で顎髭をしごきなから語る。

「昨夜、空き部屋を掃除しようと思ったら勝手に棲みついていたんだ。まあ害はなさそうなんだほっといたんだが……」

「ほっとくくなよ。もしかして、あれか？ このせか……この国では、獣人族？ は、獣と同じ扱いなのか？」



「いや？ 普通に人間と同じ扱いだが……」

「じゃあほっとくなよ」

「いやだって、なあ？ 昨日見付けた時は、あの札に「DONOTDISTURB」起こさないでくださいって書かれてたもんで……」

「ホテルか」

ぐるんと綾乃を振り向いてそうツッコむも、綾乃は無言でホワイトボードをフリフリさせるのみ。いや、よく見たらしっぽもフリフリしていた。段ボールの中からピョインと飛び出した犬のしっぽが、どこか期待するように左右にフリフリ。

「ああくにいちちゃん。こいつが気になるんなら、引き取ってくれねえか？ こいつもそれを望んでいるみたいだし……」

「いやまあそれはもち——いや、一旦仲間と相談してから……」

そうしてアリサとマリヤを呼んだところ、二人も一昔前の捨て犬スタイルで自ら飼い主を募集する綾乃に驚いたものの、綾乃を仲間に加えることに同意。結局、そのインパクトが強過ぎて本来の目的である騎獣を見繕う気も失せてしまい、三人は綾乃を連れて一度店を出た。

（あれ、どうなってるんだ……？）

どういう仕組みなのか、歩く綾乃の後ろをずっと付いて回っている段ボール箱を見て、

政近は疑問符を浮かべる。その間に、綾乃と手を繋ぎながらメニュー操作を終えたパーティーリーダーのアリサが、困惑気味の声を上げた。

「とりあえず、パーティーに加えたけれど……君嶋さんであることは間違いないみたいね。名前がそうなってるし……ただ、種族が犬人族ってなってるけど」

「……まあ、有希もなんか妖精になってるし、そこら辺は気にしないでいいんじゃないか？」

「職業はメイドさん……これは見たままね。ん〜でも、メイドさんって戦えるのかしら？」

「どうでしょうね？　なんか隠密系のスキルをたっくさん持つてるので、暗殺者的な立ち回りは出来そうですけど……」

ついでに言えば、固有スキルも持っていた。その名も《従者たるもの空気たるべし》。その効果は「精神統一することで空気になることが出来る」というなんともふわっとしたもの。

「……」

すぐく主張強めなスキル名と曖昧な効果に政近が無言になる中、アリサが声を上げる。

「そうは言っても、武器がないことにはどうしようもないじゃない。何か、武器を買った方がいいんじゃない？」

そのもつともな提案に政近も頷きかけたところで、フードの袖がツンツと引つ張られた。振り向くと、無言で政近を見上げる綾乃が、おもむろにメイド服のスカートを持ち上げる。すると、露出したふともも部分に、ベルトで固定されたシャーペンがずらり。

ドヤア、と得意げに鼻を鳴らす……ようなことはしていないが、なんとなくそんな雰囲気を目を閉じむいっと唇を引き結ぶ綾乃。その顔を見て、スカートを持ち上げるという突然の暴挙に固まっていた九条姉妹も、ぎこちなく首を傾げる。

「えっと、これが武器……ってこと？」

「ええっと、あ、一応装備欄に武器として載ってるわよ？　“シャーペンのようなもの”……って、シャーペンじゃないの？」

「そもそも、さっきからなんでしゃべらないんだ？」

問い掛けるように綾乃を見るも、綾乃は首を傾げるのみ。もしやなんらかの状態異常でしゃべれないのか……とメニュー画面を確認するも、特に原因らしいものは見付からず。

「うーん……まあよく分からんけど、とりあえず防具はあるよなあ」

綾乃の露出過多なメイド服(?)を見て、政近はそう呟く。

恐らく、犬のしっぽを外に出すためにこうなっているのだろうが……綾乃のメイド服は上下でセパレートになっていて、腰から胸下までが完全に露出しているのだ。しかも上部がノースリーブなため、これはもはやメイド服というより水着に近いかもしれない。し

かも背中側は編み込みになっているため、背中ほぼ剥き出し。後ろからの攻撃には全くの無防備だった。

『ほう、ここまで惜しげもなく背中を晒しているとは……自分の強みをよく分かっている』

『綾乃の背中を推してるの、お前だけだぞ』

アホな批評をする有希に頭の中でツツコみながら、政近はアリサやマリヤに言う。

「とりあえず、もっと頑丈な装備に着替えさせた方がいいですよね」

「そうね」

「うん、この服はこの服で可愛いけどね」

「！」

と、そこで綾乃のしつぽがブワツと逆立ち、綾乃は体全体でブンブンと首を左右に振った。

「な、なんだ？」

その激烈な反応に政近が視線を下ろすと、綾乃はずいっと身を乗り出してホワイトボードをひっくり返す。すると、そこには「いらないます」という文字が。

「……いや、いらないうって言われても、そんな防御力皆無な装備じゃ戦いには連れていけないよ？」

少しのけ反りながらも冷静にそう返すと、綾乃は再度ブンブンと全身で拒否し、ホワイトボードをひっくり返す。

「これが、わたくしの戦闘服です！」

「いやそれどうなってるの？」

ひっくり返す度に書かれている文字が変わる不思議な首掛けホワイトボードに、政近は耐え切れずにツッコむ。

しかし、綾乃が無言で首を傾げたのを見て、政近はメニューを開くと綾乃の装備モデルのホワイトボードをタップした。

“ホワイトボードのようなもの”

「うるせえよ」

何の説明にもなっていない名前と何の説明も書かれていない詳細欄にツツコミを入れ、政近はついでに、なぜかずつと綾乃の足元に付いて回っている段ボールをタップした。

“段ボールのようなもの”

「……」

無言で右手をピツと横に振り、メニュー画面を消す。

「うん、まあ本人は嫌がってるけどとりあえず防具は着けさせるか。危ないし」

「そうね」

「さんせーい」

「!!」

そうして、分からないものは一旦気にしないようにして、政近たちは武器防具屋に向かった。

続きは

アニメ

『時々ボソッとロシア語でデレる隣のアーリャさん』  
Blu-ray・DVD第1巻初回生産特典でお楽しみください！